B.Smetana Má Vlast 1.Vyšehrad

　チェコの作曲家ベドジフ・スメタナの代表作である連作交響詩『わが祖国』はチェコの伝説、風景、歴史を扱った六つの交響詩から構成される。スメタナの命日である5月12日より開かれる＜プラハの春＞音楽祭の初日を飾る曲目でもあり、チェコの国民主義的音楽の代表として多くの聴衆に長く親しまれている。

　今回の演奏会で取り上げる第1曲「高い城」は、ヴィシェフラドという城を題材としている。中世チェコのプシェルミスル朝はこの城の元で長期に渡り繁栄した。しかし、15世紀のフス戦争で城は崩れ、スメタナの時代には岩山が残るのみだった。『わが祖国』構想中に作曲された歌劇『リプシェ』も、この城に君臨した建国の女神リプシェが主役の話だ。

作曲完成は1874年11月。スメタナは聴覚障害による耳鳴りや頭痛に苦しみながらこの曲を生み出したのである。

ある詩人がヴィシェフラドの城跡を眺め、伝説の吟遊詩人ルミールの竪琴を思い浮かべる。ハープが奏でる印象深い変ホ長調の動機である。この動機は第1曲だけでなく、第2曲「モルダウ」、第6曲「ブラニーク」にも登場し、作品全体で重要な役割を持つ。

　ルミールは城の全盛期を語りだす。ハープのカデンツァが終わりファゴットとホルンが最初の動機を受け継ぐと、騎士の集合を告げるトランペットの合図が遠くから鳴り響く。ヴァイオリンには「モルダウ」冒頭と同じ音型が現れ、在りし日のヴィシェフラド城が目に浮かぶようだ。主題となった冒頭の動機がトゥッティで奏されると[譜例1]、祝典の場面が姿を見せる。騎士達が勝利の喜びを歌い上げると、その歌は城全体に何回もこだましたのだった。

　短い間奏を挟み、ルミールは城が崩壊する原因となる闘争の場面を歌い出す。冒頭の動機は対位法を駆使して徹底的に変形される。壮大な玉座の広間は瓦礫へと変貌し、木管楽器はかつての栄光を懐かしむような旋律[譜例2]を奏でる。分散和音を用いた動機を挟んだ後、この旋律はティンパニとトランペットの三連符を伴奏に再び現れ、興奮は頂点に達する。

　長い間沈黙していたルミールの竪琴が最初の動機を鳴らし、場面は現在へと戻る。ヴィシェフラドの歴史を回想していくにつれ追憶の感情はいっそう募る。チェコ王朝を支えた城の栄枯盛衰を表すように、この動機はもう一度だけ力強く響かされ、この名曲は静かに終止符を迎える。

参考文献

音楽之友社(1980)「最新名曲解説全集 第４巻 管弦楽曲Ⅰ」

文責　Perc. 村田大樹

(996文字)

譜例1 Vn.1 43-48小節

譜例2 Cl.1.2 144-151小節